

## 「全鍍連」 2020年 11月号 巻頭言

全鍍連 総務担当副会長 草間 誠一郎 (株)三ツ矢 代表取締役)

「デジタル対応」



ゆで蛙という戒めがありますが、コロナウィルスはデジタル化が徐々に進むぬるま湯で満喫していた蛙たちに熱湯を浴びせました。さらに次は「デジタル庁」という第二の熱湯が政府で準備されているようです。

インドの神が賢者の姿になり、王にチェス(64マスあります)の勝負を申し込み、チェスが好きな王は喜んで受け入れ、王は賢者がチェスに勝った時はどのような褒美が欲しいかと尋ねました。

賢者は、チェスの板の1日目は1マス目に1粒を置き、2日目は2マス目に2粒、3日目は3マス目に4粒、4日目には4マス目に8粒..  $2^n$  というように64日間お米をいただきたいと要望し、王は喜んで承諾して勝負は賢者が勝ちました、後で王様は大変な後悔をすることとなります。

これを数で表すと1844京6744兆737億955万1615粒、世界の人が1日3食、1回あたり1合お米を食べたとしても、383年と言われています。(諸説あります)

今後のデジタル化は過去の体験経験以上のことが起きる、今は $2^n$ の「指数曲線的劇的変化」の入り口にきているのではないかと感じます。

1986年当時私が勤務していた会社の営業所に親会社の活性炭事業部が移管されそこにFAX(まだ高価)が設置されその早さと便利さに感心し、瞬く間にFAXがないとビジネスができない環境となっていきました。

このFAXも原理は1848年発明であり、産業遺産としてスミソニアン博物館で展示されるようになりました。

FAXはゆっくり進む「デジタル化」の時代では官庁や企業間で信頼確実性が求められる連絡手段として重宝され、高齢者やIT知識が少ない方、PCやネット通信などのIT環境が整っていない事務所などでは「手軽さ・馴染み深さ」といった理由で重宝されてきましたが、コロナ対応で必須のスピード力では情報共有集計等で裏目に出たことはご存じのことと思います。

ゆっくり進んでいたデジタル化にコロナウィルスという熱湯が注ぎ込まれて会議や会合も変化しつつあります。

IT環境を整えて一部組合、青年部、若手研究会ではオンライン会議システムの「Zoom」を採用し活動が再開され、スマートフォンやタブレットで参加される若手も見かけるようになりました。

P検定5級というのがありますが、この程度は常識であるデジタル時代となりつつあります。

(P検定5級 [https://www.pken.com/tool/05\\_test.html](https://www.pken.com/tool/05_test.html))

しかしまだに大会、総会等大人数でのオンライン開催については各組合員の情報通信環境の格差課題があり、希望者が全員参加できるようにどう対応していくのか、リアルな場が必要な時どうするか、各組合、全鍍連事務局が頭をひねっている状況です。

最近はデジタル新用語が多くでてきてついて行けませんが、「デジタル庁」という第二の熱湯と2<sup>n</sup>の「指数曲線的劇的変化」に備えて、我々はさらに勉強や環境整備をして、ゆで蛙にならない必要に迫られています。